

高齡化社会の生活を考える — 高齢者になった時の不安 —

○栗畑亜紀子、今中正美、石渡尚子、村田あが、本間小枝子、道本千衣子
(跡見学園女大短大)

目的：1999年の「国際高齢者年」に際し、2010年には65歳以上の人口の割合が22%になると推計されている日本で、よりよい高齢化社会の生活を考える一助とするために、高齢化社会に対する意識調査を行った。

方法：1999年度家政科学生の「私が高齢者になった時の不安」という作文を基に、高齢者との関わり、高齢期の衣、食、住生活並びに経済面、介護についてのアンケートを作成し、1999年9月、学生及び父兄に対し実施した。

結果：①自分が高齢者になった時を考えたことがあるという学生は、48.6%で父兄の87%より有意に少なかった。自分の高齢期に「非常に」あるいは「やや」不安を感じている者は、学生の71%、父兄の84%で父兄の方がより不安感を抱いていた。②衣生活への不安は、学生、父兄の約20%が持っていた。食生活への不安を持っている者は学生、父兄の約40%で、不安内容は、学生は「どんな栄養を摂取したらよいか」、父兄は「食事を作れるか」が最も多かった。住生活への不安を持っている者は学生の55%、父兄の約40%で有意に学生が不安を持っていた。その内容は、学生、父兄共に「住まい内の安全」という回答が最も多かった。高齢者対応型にリフォームすることへの不安は、不安を持つ父兄の約18%であったが、学生より有意に多く認められた。③高齢期の経済面への不安は、学生、父兄の70~80%が、介護に対する不安は、学生、父兄の70%以上が持っていた。